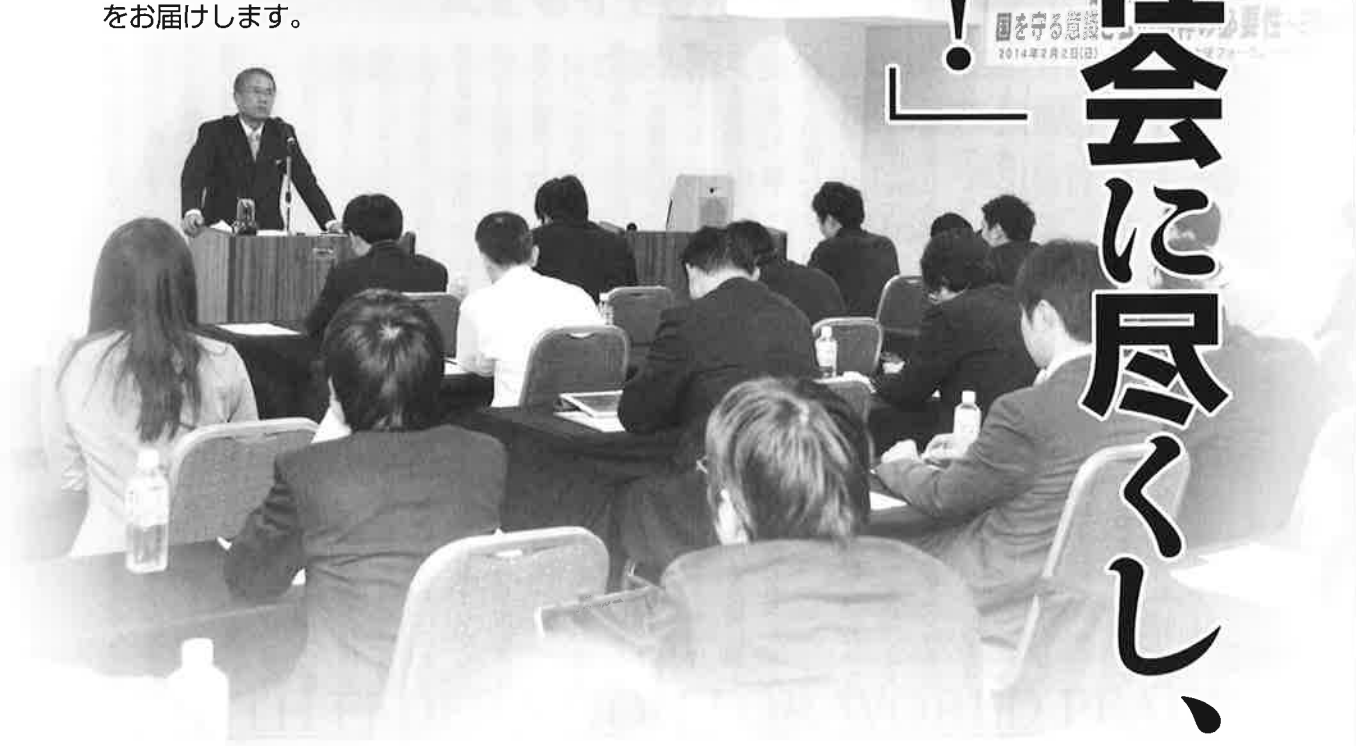
「人に尽くし、社会に尽くし、国家に尽くせ！」

特集

誌上講演
「日本青年への期待」
第5弾

世界平和青年連合（YFWP）は、「人類一家族平和世界」のビジョンの下、平和世界創建の未来の旗手としての若き青年指導者育成の一環として、「青年指導者フォーラム」を開催しています。毎回、各界を代表する指導者を講師としてお招きし、テーマ講演、質疑応答、グループディスカッション、討議発表、講演者による総括の流れでフォーラムは進行します。参加者にとっては、各界の指導者、専門家の示唆に富んだメッセージに刺激を受けながら、今日的な諸問題を活発に議論できる貴重な場となっています。同フォーラムは共通テーマとして、毎回「日本青年への期待」を掲げています。今月号の特集では、誌上講演「日本青年への期待」第5弾として、第16回「青年指導者フォーラム」の講師を務められた織田邦男先生のテーマ講演（題目「国を守る意識と公の精神の必要性～日本の教育への提言と青年への期待～」）の内容をお届けします。



当事者意識の喪失

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました織田でございます。きょうは喜んで馳せ参じました。防衛大学と自衛隊生活を合わせると、私は四十年近く自衛隊で歩みましたが、その中でいろんなことを学ばせていただきました。きょうはそこから得た教訓、感じることをお話しさせていただいて皆さんと認識を共有できればと思います。

さっそく本題に入りたいと思います。私は二回留学させていただきました。一般のアメリカ市民が住むアパートに住み、近所付き合いをしながら感じたことを話します。アメリカではアパートに住む人たちは中流から中流の下ぐらいの人たちだと思います。隣のある婦人に「アメリカの安全保障政策についてどう思いますか?」と訊いてみたことがあります。すると、その婦人は堂々と自分の考えを話してきました。その考えが間違っているか否かは別として、自分の考えを持っておられることに対して、私は「ああ、素晴らしいな」と思いました。その後日本に帰ってきてから、こちらでも隣の婦人に「日本の安全保障についてどう思いますか?」と同じ質問をしてみたところ、二つの言葉が返ってきました。「反対」「子供を戦場に送るな」でした(笑)。こういう質問に関して日本人は思考が停止してしまっている、私はこれでいいのだろうかと思いました。

先の大戦で三百万人近くが亡くなったトラウマがあるのだと思います。しかし、このままでは国際社会を乗り切れないと思います。日本人一人一人が考えなければならない問題を考えないようにしています。戦後、吉田茂首相が「吉田ドクトリン」というものをつくりました。「安全保障はワシントンに任せる。そしてわれわれは金儲けに専念し、復興を成し遂げる」としました。それはそれで、当時は正しかったのでしょう。その言葉どおり、短い期間で日本は復興しました。しかし、国家にとって最も大切な安全保障という問題、国に対する当事者意識、「国は一人一人の国民によって支えられている」という意識がなくなってしまい、国というものが、「ゆすり」「たかり」の対象になってしまいました。

上の句に対して下の句のない日本人

生活保護受給者が増加しています。一九九五年は八十五万人でした。今では二〇一三年で二百十六万人です。働けなくて本当に国が手を差し伸べなくてはならない人がどれだけいるのかよく分かりませんが、三倍近くも増加しているのはやはりおかしいと思います。国家は国民を守る共同体である、そのとおりです。しかし、それを支えるのは国民であるという根本的な考えが無くなってきているのです。自由には責任が、権利には義務が伴います。上の句があれば下の句があります。それが無くなってきているのではないでしょうか。

また、全国の給食未納費が二十二億円になっていると新聞で報道されました。給食費を払わないことに対する下の句として「うちの子供には飯を食わせなくても結構だ」と言うかと思えば、そうではなく、「飯を食わせろ」なのです。「公務員を削減しろ」と言えば、当然サービスは下がります。この主張も、「サービスは下がってもいいから」と言ってこそ成り立つものだと私は思います。

例えば、原発の議論。反対する人は反対しても結構だと思います。ただし、その結果は負わなければなりません。だから、「電気料金は上がっても仕方ありません」、あるいは、「地球温暖化

Profile

元航空自衛隊空将 **織田 邦男** Kunio Orita

1952年愛媛県に生まれる。1974年防衛大学校卒業。航空自衛隊入隊、F4戦闘機パイロットなどを経て1983年米国の空軍大学へ留学。1990年第301飛行隊長、1992年米スタンフォード大学客員研究員、1999年第6航空団司令などを経て、2005年空将、2006年航空支援集団司令官(イラク派遣航空部指揮官)、2009年に航空自衛隊退職。軍事専門家として『正論』『JBpress』などに執筆。防空識別圏に関してテレビ番組でコメントしている。

に貢献できなくても仕方がありません」ということを言ってこそ、ようやく議論が成り立つと思います。下の句を言わないという特性は、日本だけだと思います。

現役時代、私はエーワックス（AWACS：早期警戒管制機）という飛行機を導入する担当者だったのでアメリカのマサチューセッツ州に何度も行く機会がありました。そこで、アメリカの友人にあるブランドのバッグを買いたいから店に案内してくれないかと聞いたら、「じゃあ、隣のニューハンプシャー州へ行こう」と言って、三時間もかけて連れて行ってくれました。なぜかというと、アメリカにはフェデラルタックス（連邦税）とステイトタックス（州税）がありますが、ニューハンプシャー州には州税がないからです。なぜニューハンプシャー州には州税がないのかと尋ねたら、州民投票で決めたのだそうです。その代わりに何を削減したかというと、消防署を無くしたそうです。このように、下の句があるのです。ですから、「州税を取らない。だから火事になったら自分で消せ」ということです（笑）。私はここがアメリカの民主主義の非常にいいところだと思います。

結局、日本には、大事な「下の句」が無い。これは要するに国民としての当事者意識を失ったことを意味します。つまり、吉田ドクトリンのままずっとやってきたことの結果だと思います。

国家とは私自身である

私たちは平和を叫ぶけれども、平和を維持するためにどれだけの義務や責任があるかを言わない。これではまずいと思います。国防なくして独立も生存も繁栄もありません。それだけ国防や安全保障は大切なものなのです。そして、「人権、人権」と言いますけど、国家なくして人権なしです。チベットを見てください。国家を失った国はかわいそうです。

古代ローマの国家について塩野七生さん（作家）が「国家の運命をわがことのように思う者を市民と呼んだ」と書いています。ギリシャ・ローマ時代の市民の意味から見れば、政治に参画するというのは市民の権利で、祖国を防衛するのは市民の義務だったということです。日本以外の国ではこれは当たり前のことです。

しかし、国家というものは悪いもの、悪だと考える人がいます。国家は悪なのだから、その国家に所属する自衛隊は「暴力装置」であるという思想も出てきます。以前、宜房長官（仙谷由人氏）が、「自衛隊は暴力装置だ」という発言をしたことがありましたよね。国防とか安全保障というのはそんなに難しいことではありません。一人一人が当事者意識をもって国家の行く末を考えることなのです。それをやらないで、国家というものが擬人化されて、悪役のように取り扱われる。自衛隊や警察、官僚は国家の犬だとか政府の犬だと言われてバッシングの対象になります。私はこれに対して非常におかしいと思います。国家というものはどこにもいないのです。国家はわれわれであり、あなたがたであり、一人一人が国家なのです。

国をないがしろにする人には、私は甘えがあると思います。植民地になったことがない日本は、非常に幸せな歴史だったと思います。「日本というものはいつまでも確固としてあって、蹴飛ばしても、叩いても壊れはしない。だからいくらないがしろにされても帰れる所だ」という甘えがあるのではないかなと思います。ある政治学者に言わせると、この二百年間で併合されたり無くなったりした国家は五十一カ国あるそうです。世界百九十三カ国とすれば、国家の死亡率というのはつまり、二十五パーセントになるわけです。安心しているけれども、現実はそんな世の中じゃないということをわれわれは深刻に考えなければいけないと思います。

〝オーストリッチファッション〟でよいのか

軍隊について教えたら戦争になるというのは大きな間違いです。あたかも、「医学を学んだら病気になるからやめたほうがいい」と言っているようなもので滑稽なんですけれども、その滑稽さが分からないのです。どこの国に行ってもインテリジェンスとか軍事というのは知識人の一般教養として考えられていて、芸術や文化、思想の話をするのと同じことなのです。

リデルハートというイギリスの有名な戦略家がいますが、彼は「汝、平和を欲するなら戦争を学べ」と言いました。これが普通なのです。古代ローマの金言には「平和を欲すれば、戦争に備えよ」という言葉もあります。それが日本では、軍事や戦略と聞いた途端に思考停止してしまい、「戦争になるからそんな話はやめよう」となります。

こういう態度を見て、外国人は日本人のことを〝オーストリッチファッション〟という言葉で表現します。オー

ストリッチというのはダチョウですよ。ダチョウは自分に危機が迫ってくると穴に首を突っ込んでしまうのです。見ないようにするわけです。危機が通り過ぎるまで危機を見ない（笑）。皆さん、笑っておられますけれども、日本人の姿そのものではないでしょうか。

つまり、嫌なこと、起こってほしくないことは考えない。中国の軍事の膨張、北朝鮮の金正恩による粛清、嫌なものも見なければいけません。

与えられた平和を享受して戦後六十九年、失うものも大きかった。自主とか独立、自らの国は自らで守る気概とか、国に対する熱い思いとか、これらが消えてしまいました。

日本人は覚醒しなければならない

平和というのはつくり上げるものです。「平和の維持というものは、戦争に勝つより難しい」という言葉もあります。努力しなければ、平和を保つことはできません。汗と涙と努力、ときには血を流さなければ平和を維持することはできません。

祈ることを否定しているわけではありません。しかし、祈るだけで平和が来るでしょうか？　千羽鶴を折るだけで平和が実現するでしょうか？　憲法九条があるから平和が保てたのでしょうか？　それだけでは平和を維持することはできません。田中美知太郎氏という有名な国際政治学者が「それじゃあ、『日本国憲法に台風の上陸を禁ずる』と書いたらどうだ」ということを言っていました（笑）。努力をしなければ平和は保てませんよね？　こんなニュースが出ていました。高校生が核廃絶に対する一万人の署名活動を大々的に行ったそうです。それをやることに私は異議を申し立てているのではありませんが、高校生たちがこういうことをやったら平和が来る、核廃絶ができると思ったら大間違いだぞということを言いたいのです。

皆さん、「攻める」の反対の言葉は何でしょうか？　「守る」ですよね。今、小学校で児童たちに同じように聞くと、「攻める」の反対は大半が「逃げる」と答えたそうです。そういう教育をしているのです。それではいけないと私は思います。アメリカも衰退してきました。シリアでサリンという化学兵器が使われた。使ったら承知しないぞと言っておいて、結局アメリカは何もしませんでした。これを見透かして中国はどんどん踏み越えていきます。だから防空識別圏を設定する。そして、南シナ海で今度は漁業圏を設定しましたね。漁業するには中国の許可が必要になるというように主張してきた。

そういうような世の中になることに対して日本人は覚醒しなければいけません。安全保障に対して国民一人一人が正面切って考えることが必要だと思います。

日本再生の鍵は教育の正常化にあり

日本再生の鍵は教育の正常化にあると思います。個人の尊重とか、個性を伸ばすとか、権利や自由ということを主張するなら、私はそれに対する下の

句を教育しなければいけないと思います。自由には責任が、権利には義務が伴うという当たり前のことを教えなければなりません。私は自衛隊で教育を受け、自衛隊で教育をしてきました。振り返ってみて、自衛隊の教育は決して間違っていなかったなと思います。

現役最後の仕事で私はイラク派遣の航空部隊の指揮官を務めました。厳しい任務でしたが日本の素晴らしい活動に対して諸外国からは絶賛の的でした。指揮官の私もしょっちゅうバグダッドに行きました。現地で将軍たちが昼食会を開いてくれたのですが、なぜあれだけ規律正しく、誰も逃げることもなく、一件の不祥事もなくできるのかと驚いているのです。彼ら将軍からするとそれは謎なのです。「その理由を教えてほしい」と尋ねられても、「This is SAMURAI Spirits」とか言ってごまかしてきたのですが（笑）、自衛隊の教育に対する周囲の評価はそれぐらい素晴らしいのです。

東日本大震災のときも感心しました。すでに私は現役を終えていましたが、私が教育した部下たちも本当に頑張ってくれました。十万人の自衛官が動員されました。自衛隊は二十六万人いるから半分以下かと思うかもしれませんが、通常の警戒監視しながらの活動ですからほぼ全力だったんですね。交代なしです。救助した人間が二万人、遺体の収容が九千五百体……その大変さに頭が下がりました。実は、その十万人の自衛官の一割が自ら被災していたのです。家族を亡くした人が約五百人いました。

ところが、マスコミは自衛官が不祥事を起こすと鬼の首を取ったように報道します。しかし、統計的に言うと、自衛官の犯罪率は同年代の若者の十五分の一です。そこで、皆さんからは自衛隊は一体どういう教育をしているのかよく聞かれるわけですが、私は一言で答えるなら、「戦後教育と逆の教育をしています」と言います。

戦後教育というのは「国家は悪、権威は悪だ」という教育です。個人や私を優先し、公ということは軽んじて、国家や公に尽くすことを教えません。これと全く逆のやり方です。朝起きたら国旗掲揚、君が代が鳴ったらたとえトイレに入っていようとも国旗に正対して姿勢を正すということを教えます。そして、自分を捨てても社会や国家のために尽くすことを宣誓します。つまり、利他の精神です。これをずっと教育していき、実践させていきますと、日本人のDNAでしょうか、人を助ける喜び、人に尽くす喜び、国家に尽くす喜び、社会に尽くす喜びが芽生えてきます。それは何事にも代えがたい幸せなのです。人は人のために生き、人は人から生かされているということを実感したとき、人はまっとうな人間になります。ラグビーの言葉に「One for all, all for one（一人は皆のため、皆は一人のため）」というのがありますが、この考え方です。

救難隊という部隊が自衛隊にあります。嵐の真ん中で遭難しているときなど、非常に過酷な任務のために警察も、海上保安庁も、消防も出動できないときに、自衛隊から救難隊が出動するのですが、彼らのモットーが「That others may live（他を生かすために）」です。人間には人を助ける喜びというものがあり、これを実際に自分が行っているという自覚ができたときには本当に素晴らしい人間になります。人類普遍の真理だと思いますが、国家や公に尽くすこと自体が自己実現だということです。

日本では、こういうことを言うだけで、「あいつは右翼だ」というレッテルを貼られるのですが、新約聖書には「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」と書かれています。伝教大師（最澄）は「己れを忘れて他を利するは、慈悲の極みなり」と言っています。ローマ帝国の歴史家キケロは「あらゆる人間愛の中で

織田先生の講演を受け、ディスカッションで積極的に意見を交わす参加者の皆さん

も、最も重要で最も大きな喜びを与えてくれるのは、祖国に対する愛である」と言いました。

こういうことを教え、実践させてあげることによって人間は本当に変わると思います。それを実際に私は体験したので皆さんには強くお話ししたいのです。

具体的には、私は部下に対して、「身を清め、時を守り、礼を尽くす」、これが基本だと考え、教えてきました。身を清めるというのは、相手が不快に思うような格好をするな、髪は常に櫛(くし)が入り、服装は常にブラシを入れ、整理整頓するということです。時を守るというのは、千人いて、一人が一分遅れれば一千分の無駄になりますから五分前精神というのが海軍からの伝統です。礼を尽くすということについては言葉遣いや長幼の序、上官に対しては敬礼するというところからやりました。義務教育でもやるべきだと思います。指導者やエリートを育てるにあたり、イギリスなどではこういうことから教えています。

海外で成功した教育改革の事例

諸外国の教育事情について紹介します。私が子供を連れてアメリカに行った時はレーガン政権下で教育を変えていましたが、アメリカも一九六〇～七〇年の前半といえば今の日本の教育ぐらいひどい状態でした。子供中心主義がはびこり、自由化、人間化、社会化を教育理念に進めていた時代です。つまり、学校を楽しい場にするという考え方です。ですから、暗記とか計算ドリルなどを一切やめました。ゆとり教育のようなものです。その結果どうなったのかというと、教師は毅然(きぜん)たる姿勢を失い、生徒の機嫌をとり、こびへつらう芸人と化し、生徒は権威に対する尊敬を忘れて刹那的になった。今の日本に似ています。

一九七〇年代初頭、アメリカの学校は古き良き教育が完全に崩壊しました。麻薬、アルコール、十代の妊娠が急増、十五～十九歳の自殺率も三倍になりました。それで、中産階級の親御さんは子供を公立学校に入れず、私立の学校か自宅で教えるようになりました。その後、八〇年代にレーガン大統領が登場し、それまでの学校教育に危機感をもって、素晴らしいリーダーシップを発揮しました。「アメリカが世界に対して優位を保っているのは教育である。今、世界の競争相手にその地位を侵されようとしている。その原因は教育である」ということで教育改革

をやりました。どんな改革だったかというと、「Zero tolerance（ゼロ・トレランス）」、つまり、「絶対に妥協しない、容赦しない」という指導方法です。子供が何か悪いことをしたり規則を破ったら、絶対に見逃さない。手の付けられない生徒は特別なスクールに入れ、更生したら戻すという取り組みをしました。それが結局、子供のためになったのです。

イギリスのサッチャー首相も教育改革を行いました。イギリスもアメリカと同様、教育が荒廃していました。一九八〇年代まではひどかったんですね。今の日本の自虐教育のようなものです。「アジアやアフリカを略奪してきたイギリスはアジア・アフリカの人骨でできているのだ」「黒人の奴隷を売りとばした」「地球を食い散らかした豚だ」というようなことを教えていたのです。そうすると、子供たちは自信を喪失してしまいます。伝統的価値観を失ってしまっていました。

それで、改革すべき当時の荒廃した教育に対する代案を示す『教育黒書』という本を民間の人が出版しました。過激な性教育を行い、道徳を教えず、悪いことをしても注意せず、結果、校内暴力が起こり、学力が低下していた状況下で、まず、サッチャー首相は『教育黒書』を作った人たちを集めてスタッフとしました。次にその人たちが父兄に対して、こんな教育が行われているんですよというような説明をしていったわけです。そこから、こんな教育はおかしいという声が湧き上がっていき、元の教育に戻したという経緯がありました。サッチャー首相のとった手法はなかなか素晴らしいと思います。

歴史教育の重要性

日本の教育の再生には、特に歴史教育が重要です。トインビーがこういうことを言っています。「ある国を衰亡させるには、その国の先人たちが気概を示した歴史を教えなければいい」と。今、西郷隆盛や大久保利通、東郷平八郎を知っている子供がどれだけいるでしょうか？　自分たちの身を挺して近代日本をつくってきた先人の気概を教えていないですね。過去、太平洋戦争で日米が戦ったことも知らない学生がいて、「どっちが勝ったの？」と言ったそうです。本当かなと思いますけどね。

「イスパノフォビア」という言葉があります。これはどういう意味かというと、七つの海を制覇したスペインが凋落したのはわれわれの先祖がインカ帝国を滅ぼし、世界を植民地化してとんでもないことをしたからだという悪い面を徹底して教えて、スペイン国民が自国を嫌悪するようにしたことです。そうすると子供たちは自虐的になり、自分の国に対する誇りを失ってしまいました。日本がやっていることもまさにこういうことです。

イラク戦争でバグダッドに行ったとき、イギリスの将校に対して、「あなたのところでは阿片戦争のことをどうやって教えているんですか」という意地悪な質問をしたことがあります。そうしたらきりっとした顔になって、「なぜ阿片戦争を教えなければいけないのか！」と答えました。そして、「国民としての一体感を育み、先人の気概を教えて、これから国のために頑張ろうということを子供たちに教えるツールが歴史教育だ」と彼は答えました。私は「なるほど」と思いました。だから、阿片戦争というのは教材としてはふさわしくないので歴史教育では教えていないのだということでした。ですから、そういうものは大学に入ってから自分で勉強すればよいという話です。

「伊藤博文を殺したのは安重根」という日本の教科書を見てみてください。息子の教科書を読んで驚きました。安重根は太字でゴシック体、伊藤博文は平文です。伊藤博文は近代日本をつくった英雄ですよ。それを殺した安重根は日本から見たらテロリストです。歴史というのは水滴と一緒で、それを見る角度によって見え方が違うのです。霧にも見えたり、虹にも見えたり、雲にも見えたりするわけです。ですから、「韓国が安重根を英雄として見る、それはどうぞ。しかし、われわれは違います」それでいいのです。なぜなら同じように、アメリカの初代大統領のジョージ・ワシントン、彼はイギリスでは「トレイター（Traitor、反逆者）」としていまだに教えられています。イギリスから見れば、歯向かって独立していったわけですから当然反逆者です。それはそれでよいのです。それをなぜ日本の教科書では安重根を太字で教える必要があるのかというわけで、一事が万事、私は日本の教科書はおかしいと思います。たぶん、イギリスから見たら日本の教科書は異常に見えると思います。

チェコの作家にミラン・クンデラという人がいますが、「民族を抹殺するのに一番良い方法は、その民族の記憶を失わせることである」と言っています。幕末の何千人、何万人という志士

織田邦男先生（前列中央）と記念写真に納まるフォーラム参加者の皆さん

たちが近代国家をつくるために気概を示して亡くなっていった歴史というのは、ほとんど知られていないのではないでしょうか。民族の歴史や記憶を失わされているように思います。

ベニスの歴史家ジョバンニ・ボテロは、「偉大な国家を滅ぼすものは、決して外面的な要因ではない。それは何よりも人間の心の中、その反映たる社会の風潮である」と言っています。また、トインビーは「われわれは常に、自らの内にある『虚ろなもの』によって亡ぶ」と書いています。日本は豊かになって、内から溶解しつつあるのではないかと思います。しかし、一方でトインビーはこんなことも言っています。「いかなる国家も衰退するが、その要因は決して不可逆なものではなく、意識をすれば回復させられる。国家の衰退の決定的要因は自己決定能力の欠如だ」と。ですから、決定していけばよいのです。道徳教育をすればいいし、日本史を必須にすることも私はいいと思います。その意味で安倍首相の方向性は決して間違っていないと思います。このように、教育というものは非常に恐ろしいのです。

福沢諭吉がこういうことを言っています。「政治上の失策は影響が大きいが、それに気付いて改めれば、鏡の曇りをぬぐうのと同じで傷痕は残らない。しかし、教育の場合は、阿片のように全身に毒が回って表面に現れるまでに歳月を要し、回復には幾多の歳月を要する」

ですから、今から気付いて始めても大変かもしれない。しかし、きょうここにお集まりの皆さんのような一人一人が自覚して、「日本を直していくんだ！」という意識が増えていけば直ると思います。

安全保障の原点

安全保障というのは難しい話ではなく、「日本の行く末を考えること」、「これが原点ですし、「自分が国家に対して何ができるかということを考えること」だと思います。「人に尽くし、社会に尽くし、国家に尽くすこと」、これを実践できた私の三十九年間の自衛隊生活は本当に幸せな人生だったと思います。これが私たちの人生の目的であると言っても過言ではないと思います。

素晴らしい日本の次世代をつくっていくために、皆さんとともに頑張っていきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。